

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：33104

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23521001

研究課題名(和文) 鳥海山をめぐる国境文化の歴史民俗学的研究

研究課題名(英文) Mt. Chokai Border Culture and Folklore Research

研究代表者

神田 より子(KANDA, Yoriko)

敬和学園大学・人文学部・教授

研究者番号：40247424

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：鳥海山は近世期以降人為的に作られた国境を巡って騒動が絶えない状況が続いていた。それが5年前に国の史跡指定を受け、山形県・秋田県という県境を越えてまとまりを見せ始めた。本研究では史跡指定を受けて以降、長年の騒動を超えて地域住民がどのように主体形成とアイデンティティ獲得を目指して行動したのか、そのプロセスをたどって分析を行った。

山形県、秋田県の2市1町が『史跡鳥海山報告書』を作成し、神田は上記の成果として第4章鳥海山の修験と文化の中で、これまで史料批判なしに作られた市町村史や郷土史を作り替える新しい研究の知見を踏まえた報告を行った。

研究成果の概要(英文)：Disputes between Yamagata and Akita Prefecture over Mt. Chokai were continuous since the Early Modern period. However, after Mt. Chokai was designated as a national historical site five years ago, the prefectures have developed an understanding. This research analyzes how residents overcame their longtime disputes, autonomously involved themselves in their communities, and developed new identities.

Municipalities in Yamagata Prefecture and Akita Prefecture issued "A Historical Site, Mt. Chokai, Report." However, no academic criticism was devoted to historical sources used for the report. In this study, the researcher analyzed Chapter 4, "Mountain Asceticism and Culture of Mt. Chokai," of "A Historical Site, Mt. Chokai, Report." The results suggest possibilities of revising official city, town, and village histories, as well as local folk histories.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：民俗学 宗教 修験 地域のアイデンティティ 鳥海山 山岳信仰 矢島 滝沢

## 1. 研究開始当初の背景

鳥海山は修験道の霊山としての歴史を背景に、5カ所の修験集落が独立した宗教集落として形成されてきた。この地域は山形県と秋田県の2県3市1町が隣接し、人為的に区切られた境界によって、人々の生活と文化を分断した歴史を持つ。近世期には山頂を巡って、矢島口と蕨岡口が矢島藩と酒井藩を巻き込んだ藩境争いに発展し、結果として今の県境にもなっている。また明治の神仏分離令の際には蕨岡口と吹浦口で祭祀権を巡って裁判を起し、今でもかつての争いの火種を残している。

そして現在地域の境界を越えて、鳥海山全域を国指定の史跡とすべく調査が行われ、初めて「鳥海山」をキーワードに地域が一つにまとまろうとしている。当該地域はご多分に漏れず、森林伐採、自然環境の荒廃、里山の保全、過疎地域の再生といった、現代社会が抱える問題に直面している。しかし鳥海山山麓周辺の歴史と代々培ってきた民俗文化が、「史跡」という新たな名目を得ることで、「地域住民の主体形成」と「新たなアイデンティティ獲得」がなし得ると考えられる。

世界遺産を巡っては、橋本裕之の「文化財行政と民俗学」(『日本民俗学』227 2001)、才津裕美子の「民俗」の「文化遺産」化をめぐる理念と実践の行方」(『日本民俗学』247 2006)などの論文が、文化行政と民俗学をめぐっての主要な議論であった。また岩本通弥編『文化政策・伝統文化産業とフォークロリズム - 「民俗文化」活用と地域おこしの諸問題 - 』平成13 - 15年度科学研究費補助金(基盤研究(B))(1)研究成果報告書(研究代表者岩本通弥)は、文化遺産になったことの影響について、自分たちの住まいである合掌造りを文化遺産にして、観光資源として活用している白川郷の現状を考察した。これらの研究は、文化財行政や観光といった外部の要因を主として分析されたものである。本論では、

研究代表者が平成7年以降継続研究してきた実績を踏まえ、地域と十分にラポールがとれていることから、地域住民との連携を踏まえて、地域社会の側からのアプローチが可能であり、現代社会が抱える諸問題を地域での実践を踏まえて提言できる。

## 2. 研究の目的

現在地域の境界を越えて、鳥海山全域が国指定の史跡となり、代々培ってきた民俗文化が、「史跡」という新たな名目を得ることで、「地域住民の主体形成」と「新たなアイデンティティ獲得」がなし得るかどうかを検証することを目的とした。

## 3. 研究の方法

鳥海山麓修験に関してこれまで研究してきた研究代表者の成果を基に、当該地域の現状を把握するため、かつての修験集落である山形県遊佐町蕨岡と吹浦、秋田県にかほ市小滝、由利本荘市矢島と滝沢の5集落と、それらを所轄する市と町で現在行われている史跡指定へ向けての動きを調査、分析し、随時提言も行った。その上でこれらを踏まえた成果を学会や地域住民を対象にした講演やシンポジウムで発表し、報告書を提出する予定である。

## 平成23年度の計画

これまで研究代表者の調査の手が入っていない秋田県由利本荘市矢島と滝沢集落での修験集落調査を行い、資料を収集した。また遊佐町蕨岡、吹浦そして秋田県にかほ市小滝に関しては科学研究費補助金による調査を行い、報告書も作成してきたので、平成19年度以降に刊行された資料の収集を行った。それ故23年度は矢島と滝沢集落を集中して調査するため、資料購入または図書館で複写をした。現地調査と資料収集のため夏季・春期休暇を利用して、それぞれ5泊6日の調査

を行った。また研究協力者にも現地での資料収集や調査に従事してもらった。

#### 平成 24 年度の計画

前年に引き続き現地調査と、資料収集を行うため、夏季・春期休暇を利用して、それぞれ 5 泊 6 日の日程で現地に赴いた。また研究協力者にも現地での資料収集や調査に従事してもらうためその旅費と謝金を支出した。

#### 平成 25 年度の計画

最終年度となるので、補足調査を行い、分析結果を学会等で発表を予定し、報告書を作成した。それぞれ 5 泊 6 日の国内旅費を支出した。また研究協力者にも現地での資料収集や調査に従事してもらうためその旅費と謝金を支払った。

#### 4. 研究成果

鳥海山の周辺に位置し、それぞれが独自に宗教活動をしていた各修験集団を概括し、類似点と独自性をそれぞれ捉えてみた。その結果、修験という視点から見てみると、相違点よりも共通点のほうがより多く見いだすことができるように感じた。今後更なる研究が進みそれらを詳細に検討する必要があると考える。とくに近世期以降に醍醐三宝山院が当山派棟梁として東北地方に入って来る以前の、南都における当山正大先達衆や関東真言宗の修験者たちの東北地方での足跡はいつ頃からあったのかは不明のままである。小滝にも、矢島にもその痕跡は残るが、これらは近世期になってからのことで、それ以前の時期は不明である。さらなる資料の発掘が望まれる。

(1)それぞれの地域について比較のために述べておく。山形県遊佐町に位置する蕨岡、吹浦、秋田県にかほ市象潟に位置する小滝が芸

能を修験道の修行の階梯として取り込んでいることであり、これらは修験道研究という視点から、山形県の内陸側にいくつか見られる舞楽等の芸能との比較が必要になってくる。一方、秋田県由利本荘市に位置する矢島はそうした年齢階梯に合わせた芸能は見られないが、東北地方の広い範囲で残る獅子頭や、獅子舞を中心とした芸能との共通点についてさらなる考察が必要となる。獅子舞は本田安次の『山伏神楽・番楽』（本田 1994）により、神楽や番楽の一演目として注目が集まっていた。しかしそうした点のみに注目すると、前述したような歴史的な視点からの修験道の霞場や旦那場の問題と獅子舞の関連が見えにくくなってしまう。今後に残された課題としたい。

(2)こうした研究の成果と本研究の課題である「鳥海山をめぐる国境文化の歴史民俗学的研究」に至る道筋を振り返ってみる。まず平成 20 年から 22 年にかけて実施された山形県遊佐町を中心とした「国指定史跡鳥海山 史跡保存管理計画策定委員会」の提言が大きなきっかけとなった。これを受け、国指定史跡鳥海山を構成する各史跡が所在する山形県遊佐町、秋田県由利本荘市、同にかほ市の 2 市 1 町が協定を締結し、まず平成 23 年には『史跡鳥海山保存管理計画書(山形県版)』が、そして平成 24 年には『史跡鳥海山保存管理計画書(秋田県版)』が発行された。これらを踏まえて山形県側と秋田県側が共同で『史跡鳥海山文化財調査報告書』（平成 26 年 3 月）を発行するに至った。後述するが、研究代表者の神田は第 4 章「鳥海山の修験と文化」（353～419 頁）を担当した。

(3)この過程で生じた地域住民の鳥海山の国境を巡る、近世期以来続いてきた葛藤を解消するに至る様々な取り組みに焦点を当てる

ことが本研究の大きな課題であった。その結果、住民の自主的な取り組みとして以下のような成果がこの数年間の間に見られた。

(4)秋田県利本荘市滝沢森子地区は、かつて滝沢修験の本拠地であった。それが神仏分離令以降に森子大物忌神社となった。そのため所蔵の薬師如来像、薬師十二神将象、日光月光両菩薩像などは顧みられることなく忘れられていた。しかし史跡指定を受けて町民が立ち上がり、境内地、旧登山道、駐車場の整備等を独自に行い、そうした行動を通して地元の歴史文化を顧みる視点を獲得した。

(5)鳥海山を巡る地域の住民が「鳥海山の会」という自主的なグループを作り、鳥海山の宝でもある豊かな食材や酒などを通じた食文化を始め、鳥海山を巡る様々な文化の発信をすべく、毎月1回集まって活動を始めた。

(6)これまであった鳥海山麓の芸能文化発表の機会を拡大し、山形県側、秋田県側の両方が一緒になって交互に発表会を行い、それぞれが出演して交流の機会を増やしている。研究代表者である神田は平成26年10月26日に山形県遊佐町で開催される芸能大会において、解説をする予定である。

(7)鳥海山麓で、これまで研究代表者である神田が調査に入っていなかった由利本荘市側の旧修験家の人々が、自分たちの家の資料や古文書が歴史文化的に価値のあるものだと気づいてくれた。その成果は現在印刷中の『科学研究費研究成果報告書 鳥海山を巡る国境文化の歴史民俗学的研究』に納められている。今後さらに地元発の修験文化研究が活発になることが予想される。

(8)平成26年2月8日には由利本荘市主催で

地元の方々に向けて鳥海山セミナーが開催され、研究代表者である神田が「鳥海山の修験」と題して講演を行った。

(9)山岳修験学会鳥海山大会開催を予定(2014年9月13日~15日に秋田県由利本荘市において開催)している。ここでも鳥海山の修験と文化と題しての基調講演、及び鳥海山修験に関連する芸能の解説を行うなど、地域住民の方々にも積極的に声かけをして研究成果を報告する予定である。さらに9月15日に予定している鳥海山麓修験集落を巡る「修験ツアー」では地元の方々の協力で、普段では見ることのできない修験資料を見学する予定である。こうしたことも地元の方々に鳥海山という地域の財産を知り、その文化を再認識できる機会となることが期待できる。その結果として、国境文化を巡る長いコンフリクトに風穴を開けることになることを望んでいる。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計3件)

(1)研究協力者 岸昌一、2014年9月14日、日本山岳修験学会鳥海山大会「東日本大震災による資料流出と鳥海山麓修験資料の保存について」

(2)神田より子、2014年9月13日、日本山岳修験学会鳥海山大会において本研究の成果として基調講演と解説予定。

(3)神田より子、2012年9月18日、日本山岳修験学会大峰山大会発表「姉崎岩蔵著『鳥海山史』を読む - 「鳥海山修験道」を中心に - 」

〔図書〕(計2件)

(1)神田より子『平成23年~25年度科学研究費補助金 基盤研究(c) 研究成果報告書 鳥海山を巡る国境文化の歴史民俗学的研究』(現在印刷中)

(2) 『史跡鳥海山 - 国指定史跡鳥海山文化調査報告書 - 』平成 26 年 3 月 編・発行 山形県遊佐町、秋田由利本荘市、にかほ市、全 421 頁 神田より子担当分 第 4 章「鳥海山の修験と文化」353～419 頁

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

神田より子 (KANDA, Yoriko)

敬和学園大学・人文学部・教授

研究者番号：40247424

### (2)研究協力者

岸 昌一 (KISHI, Shoichi)

敬和学園大学新発田学研究センター一般研究員